

〔新刊書評〕

安藤藍著
『里親であることの葛藤と対処
—家族的文脈と福祉的文脈の交錯—』
ミネルヴァ書房, 2017年

吉岡 なみ子

「里親」とは、諸事情により生まれた家庭では育てられない子どもを自らの家庭にあずかり、一定期間養育する人びとをいう。根拠となる法律は児童福祉法であり、同法第6条の4に定義づけられる。里親制度は乳児院や児童養護施設に並ぶ「社会的養護」の一制度として位置づけられている。ちなみに、社会的養護は施設養護と家庭養護に大別され、里親は家庭養護の代表格と位置づけられている（はしがき p.i）。本書は、一家庭であり、かつ社会的養護の支え手でもある里親の独特の立場性を前提として、そこで生じる葛藤やこれへの対処、養育経験に対する意味付けなどについて、里親たちの語りをもとに明らかにしようとする試みである。

本書は2014年9月にお茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科に提出された学位請求論文『里親であることの葛藤と対処—家族的文脈と福祉的文脈の交錯—』に加除を加え刊行されたものである。本書は、里親養育という限られた対象を扱ったものだが、本研究が行う作業には、ケア関係における距離化の技法や人びとの家族に対する規範的期待と葛藤、およびそれへの対処の一端を描くという、一般的な関心に通じる面がある。それゆえ本書は、福祉社会学と家族社会学におけるケアの公私概念をつなぐ試みでもあり、幅広い読者に示唆を与えるものとなっている。

本書は序章に続く8つの章で構成されており、その章立ては以下の通りである。

- 序章 里親研究の射程—家族であること、社会的養護の担い手であること
- 第1章 里親養育の概況—歴史と実態
- 第2章 里親経験はいかに捉えられてきたのか—先行研究と本書の位置づけ
- 第3章 里親たちの語り—調査・分析の方法
- 第4章 共存する「社会的養護としての養育」と「ふつうの子育て」
- 第5章 家庭であること／仕事であることをめぐって—関係機関と比較した里親家庭の意味付け
- 第6章 親であること／支援者であることをめぐって—実親との比較による里親の意味付け
- 第7章 措置委託解除後の子どもとのかかわりにおける葛藤と対処—18歳からのほじまり
- 終章 里親たちの葛藤に通底する困難とその生起メカニズム

まず序章において問題の背景を提示しながら、里親がおかれる立場性について説明がなされる（第1節）。続いて、社会福祉学、臨床心理学、家族社会学の領域における里親に関わる学術研究などを概観し、第2節で本研究が用いる基本概念が提示され、リサーチ・クエスチョン（以下 RQ）が立てられる。RQ は以下の3点である（p.11）。

1, 「家族的文脈」と「福祉的文脈」が交錯するところに位置づく里親は、「時間的限定性」

を意識したとき、自身の役割をどのように認知し、里親であることを意味づけているのか。また、役割間に葛藤が生じた場合はどのように対処されているのか。

2、「家族的文脈」と「福祉的文脈」が交錯するところに位置づく里親は、「関係的限制性」を意識した時、自身の役割をどのように認知し、里親であることを意味づけているのか。また、役割間に葛藤が生じた場合はどのように対処されているのか。

3、「福祉的文脈」において里親子の関係を規定してきた措置委託が終了することで、里親は自身の役割や子どもとの関係をどのようなものとして意味付け、対処するのか。

続く第1章では、養育実態を概観しながら、里親制度の移り変わりが示される。里親制度それ自体は福祉的文脈に位置づくが、里親に対する期待には家族的な規範的期待が埋め込まれ、それは里親たちの経験の意味付けと無関係ではない。実証部分の理解を深める準備として、里親制度が前提とする養育者像に、どのようにあるべき「家族」が組み込まれているのか、通時的に素描する取り組みがなされる（2節）。

第2章では、既存の里親研究や隣接領域の知見を整理し、本書の位置づけが明らかにされる。それによると、これまでの多くの社会福祉学的関心にもとづく研究は、里親を子どものための福祉資源と捉え、里親のリアリティについては、支援の文脈以上には捉えてこなかったという。家族研究として里親を取り上げた研究の多くは、里親の福祉的な立場に対する関心が抜けがちであること、あるべき家族像をア priori に埋め込んでいることに自覚的でないため、里親に期待される「家族」や「親」をめぐる諸概念と、当事者たちの里親であることの解釈が同一視されがちだとまとめられる（第1節、第2節）。第1節、第2節から導かれた課題に対し、ケア・支援の社会学からの示唆を加え（第3節）、第4節で本研究の理論的視座を示す流れとなっている。

第3章では、インタビュー調査の概要が紹介され、第4章から第7章は、里親へのインタビューデータの分析が行われる実証部分である。

第4章はRQ1に対応したものである。すなわち、家庭内の里親と子どもの相互作用に主眼が置かれ、里親子関係の「時間的限制性」に着目して構成されている。里親には子どもの過去を共有できない部分があり、将来的にも制度的な関係継続には期限がある。検討の結果、「子どもと共有していない過去」をめぐる解釈の場面では、里親は、生育歴をふまえた専門的対応という福祉的役割を取得していく過程がみられるが、日常的には「実子と同じ」という意味付けに引き寄せられる。それゆえ里親たちは、家族、親子であることを指向しつつ、福祉の担い手としての意識をたもつ調整を日々行っていることが明らかにされる。また、子どもの年齢と実親家庭への復帰可能性を考えることで生じる「将来的な時間共有の曖昧さ」をめぐる解釈では、里親たちは諸役割間の葛藤を経験することが見出される。

第5章では、児童相談所の児童福祉司や子どもがもつた施設の職員らとの相互作用や対比を通じて、里親が社会的養護の担い手の一員である自己の立ち位置をいかに意味づけるかに焦点をあてる。第6章は、子どもの実親との対比における自己の意味付けに焦点をあてる。これら第5章と第6章が、里親が「関係的限制性」を意識したときの意味付けや葛藤・対処を問うRQ2に対応する。

里親が「関係的限制性」を意識することでその立ち位置を意味付け直すのは、養育のマネジメント、子育て責任の所在、子どもからの反応、といったトピックで葛藤が生じた場面にまとめられる。養育のマネジメントは、しつけの仕方や保育園利用といった養育内容の決定をめぐる児童福祉司との意見の対立（第5章第3節）、交流のある実親の言動・価値観に違和感を覚え、実親家庭への復帰や関係維持という養育目標に覚える不安（第6章第3節）などに対処する場

面でみられた。子育て責任の所在は、児童養護施設職員や児童相談所の児童福祉司を、職務にかかわる期間の限られた時間だけでも子どもにかかわればよい存在と位置づけ、それに対し里親である自分たちは、制度枠にとどまらない「わりきらない」養育によって子育て責任をまっとうする存在（第5章第4節）だと評価する姿勢に現れていた。子どもからの反応は、子どもが実親やもといいた児童養護施設職員への思慕を示す時に、自分の子どもに向かう気持ちや唯一の養育者でありたいという気持ちを再考する対処の中に示されていた（第5章第4節、第6章）。

第7章は、RQ3に対応する。第4章から第6章までの知見を受けて、満期措置委託解除という「時間的限定性」に直面した後の元里子との関わりに注目する。措置委託終了後、元里子と関係を築くにあたって委託中のような「家族的文脈」「福祉的文脈」の交錯といった立場の重層性はなくなるものの、別の葛藤があることが示された。すなわち、子どもが里親に抱く役割期待と、里親が希望する役割とは必ずしも重ならない場合があり、その際両者のずれにいかに対処するかということが、里親にとって新たな葛藤となっていたことが示される。里親に突きつけられる自身の老いと里子への思い。抜き差しならない2つの思いを抱え葛藤する様が析出される。

以上が本書の概要であるが、本書は研究目的に沿って3つのRQが設定され、詳細な質的データの分析を通して結論を導くという構成で議論が展開されている。また、第1章第2節で整理した里親の福祉制度上の期待像と、里親たちが認識する制度運用の実態との関連について、終章では、さらに細やかに考察が加えられる（終章1節2項）。ここでの知見は、里親たちが経験する様々な葛藤の背景を明確にする。この作業が、里親制度の制度的枠組みに埋め込まれる「限定性」とケアの「無限定性」のアンビバレンスにいかに対処するのかという、里親が切り離し難く抱え込む、通底した困難の発見につながっていく。すなわち、里親によるケア

の特質は、里親制度の限定性という性質と構造的に相容れない部分があるため、里親たちは「親」や「家族」といった言葉に込められた意味を参照しつつ、「無限定性」にのめり込むように制度の枠組みを越えようとする。終章1節の後半では、このような「無限定性」へのベクトルが強化される要因や意味が考察され、現代社会が無限定なケアを求めざるをえない状況であることが指摘される。続く終章第2節で本研究の意義と今後の展望が述べられ、本書は締めくくられる。

本書は、タイトルを見てもわかるように、里親養育のフロントラインで起こる現実を詳細に伝えてくれる。ただし、この書が秀逸なのは現場の感覚を正しく伝えてくれる点だけではない。そのデータを分析し、通底するものをつくり上げる視点（「家族的文脈」と「福祉的文脈」の交錯、「時間的・関係の限定性」）を提供してくれた功績は大きい。我々の社会は、介護保険制度や子育て支援制度などの導入にみられるように、さまざまな局面で公的なケアを拡充する方向に舵を切っている。著者が社会学という道具を使って開けてくれた扉は、里親制度に限定されず、病院や介護施設、子育て支援制度など、他のケアの公私概念が混在する場にも通じるものであろう。この扉を使って、未だブラックボックスのなかに押し込まれている生活世界の身近な現象を覗いてみたいという衝動に駆られている。広義のケア論に関心をもつ、研究・実践領域の方たちに一読をおすすめする。

